



三省錄

二

9
4077
2



門 口 9
號 40777
卷 2



三省録

飲食之部

志賀忍輯

○食考の天考なりといふ考食考なるは一日もたれらざる考子考の考

板考小古考人考食考も考さ考す考不考食考を考少考し考ば考り考や考る考も考さ考す考

先考代考飲考食考で考は考る考神考一考條考り考し考や考酒考の考今考も考備考家考

小考を考素考飯考の考さ考す考と考し考て考食考を考少考し考取考り考つ考る考も考り考あり考

あ考る考所考の考聖考人考ら考今考も考食考を考さ考す考と考し考た考小考飯考を考い考つ考た考る考

食考も考古考代考の考素考飯考の考思考ひ考あ考り考辨考別考小考に考食考を考さ考す考

上考を考天子考より考下考を考庶考人考より考あ考る考も考さ考す考食考を考少考し考と考い考ふ考

於考形考も考あ考ら考る考宋考の考聶考夷考仲考也考い考つ考る考人考の考初考小考鋤考禾考日考

當考午考汗考滴考禾考下考土考誰考識考盤考中考餐考粒考々考皆考辛考苦考や考る考と考い考ふ考

中之一



きりきりよき古代の若で知り飲食の思であらやいふる
群小言其の人々果を一程ある子小いさあうげ小いらげ
つる飯子精達目小いさきけきを急ぎの肉も残さず食し
残ふらりりつた天地君父の大恩さうげや粒々み粒々
の辛苦なるもむかひめいやりまゝ世小い飯でも求めり
飯小及ふも幾何多きやで泰さきあうげらあき
あうげ何の不思といふよりうらん
燈前漫録

○古たあふ小あふ人朝鮮の飯小軍用兵
金子五拾両で借り神床の後込運さるるに悪田の宅一畝
けら小村らう別束とて綱を杖で束束持お被束一けら
如水云三板はれら一水は桶小一貯ふる骨のあぶら油の

客人を我おもはれり
あふらやと村とわらひらるる彼を拾金で返せんや梅
お厚く物を述べ終る如水この金でさら小清みらす
日々赤けぬも金の金た達上や積りおり軍用兵一六
費小あふ流金銀の塩赤けぬも酒足お極しと終ふ心
穢しと交わりしとわらりて以て儉と君との別を志るる
危懼と後る

○神君大坂な陣の羞恥のりむも出さき膳茶多味干綱を板
味香かむ何ぬらとさや豆らるる味香かむ何ぬら
上意のりしと 雨夜の燈火 駿河土産

○肥後のく小藩苗のくた有る濃肉やいふ儒者 臣小造小泰のりか

○海一陶造物として措きしもの臣を十許小むの何ぞ属者
 ともありざるをわたりたるや相諍しけむの徳内守る者
 元小持参りたる豆膏小小縁を烹炙しを小煮子なる
 をわたりたるもの一種たる杯を取らば随分酔ひし
 學問風雅の味は海肴の外小あり程小くもやれり
 ろりす紀後海ふあしを将や政制以後地中の海に切入せ
 めや禁り法大ましくも自國の海を二回小用る出やなれど
 日本は竹文のよりなりしきとて衣食の質素れりしを
 こけり早煮當炭魚塩ありて朝夕ふり流石にその美を
 はりしきとれりふね松子小鯛竹のり等も自給の味
 なる風俗として形る 肥後物語

○東瀛日そのり右大將於朝遠御景川山宿の松竹本盛細り
 竹雨越後より鐘の楚刺を列東地引書撰一切ありて
 そのりきりや和卓小居一仙小なる勢於朝の旗飯にたり
 て日只今別来小よるる味もあはれし味もあはれし
 進上平してまらるる言上は於朝あはれし和卓の字も
 自筆を傳ふる事
 竹得るる心入のちりもすもやらむわらむるも
 考討小横倣すもむかひあはれなり 市井雜談
 ○むらゝ紫式部あるるは史宣孝他知のりも獨をあがらむ
 なる史宣孝のりもあはれしやらむるもあはれし
 なる事

日のさや小をゆるさ清いもあまらぬ人あらば
と詠侍りしこと 同上

○小糸ま恒業式の上へ加るるいづれも累代遺述しそらるる品
逸を治法義を正し窮武を授育し政道正しそらるる品
なりんづる武藝者泰時時房々小式目五十條をさうめ四年に
みづらう儉をさする一食子さすり初を燭をやめさるる
業本をひろむ武式施しつらまは載のき人しそ孫時頼
賢由しそそ九代を徳らるる 北條九代記

○小糸相控入道言時護齋をさるるしそ其の宴會とやほ海九種あり
い青九種を用由り知り楠正成控り奉動をさるる人小治り日
小糸ひさしそるるるる 市井雜談

理齋曰言時を天中を知り志なり海九種あり
楠公の歎ありし今世小ありてらるるのり九種九種
時藤末しそるる時ありさるる楠公小をさるる死
やんあや必せり

○禅関山和志に道徳あるが小天施ちより愛意法師娘あり
立寄あり関山の位坊ひら入き為時時を福しけきか
負足のしりなきいさ勢る密意も小まのき治破きるる硯
ほこもつりし回五鉢をたねし小僧をたを治りて焼餅を
さやあまらぬ師をさるるが 後ふらるるを婦ふた抄あり
見えらるる 除睡抄

○飲食ら肌湯をなしそふらそら張り冷を志のぐ小やまら
中之四

飛舟の風雨で汚るうらむる華菱の流をこのむるうらむる
但し飛舟の夜振のぬらつたあまの省略やうにたのゝ
被損し難水及びなりそのうり号上賓客をたよもつた
やゆきとのたつたあまはうらむるお熱したくつた
そのわたり飲食のひしむ極厳格しく飢をやうたよ

牛の涎

○亭保の世心く六月三日の夜に依おさまし一舟乗目のうらむる

食物に勿論空外徳色潤澤ともみぶつたはのひはくち

根の酒とくく類むさく多々地おふ中括下おのりま 同上

○むらうらるる安田の飛舟おの飛をおかすひまー何ぞさるるの二種

此おれさるるうらむるうらむるのくや及ふ相寄るの

又を四つ飯をかき次なりを攝挽とまうるうらむるの宿許より

持業の一致し結うらむる中うらむるうらむるの飛舟おのりま

をかき汁海の中今てたの振舟おのりま

このまへことたお水のみ質朴一致しす用を量り物

めめお水おれらるる睡かさるる字いやむい人こむるうらむる

おれはお水おれらるるうらむるうらむるの飛舟おのりま

たるはお水おれらるるうらむるうらむるの飛舟おのりま

東照宮様御代参の日の飛舟のおのりま

おれはお水おれらるるうらむるうらむるの飛舟おのりま

なるるうらむる遠近に存り子御を飛舟におのりま

憲政令川氏書たごのうらむるうらむるの飛舟おのりま

ワウバの終ら武家バケの中なかより柿かきはあつらふるる中ちゆうわくまを
下ゲのさうりくりく飯イや糖味カウミ汁ジュをここ給タテう勢セ中ちゆうわく
有アまの右ミ中ちゆう戦場センバウにおも黒米クシメ飯イを塩シホしる小こう塩シホづ仕シを
飯イの最サイなり今イマづれたの武家バケ天テン中ちゆうの人ひとともやあくるる米メでも
あらくはは粉コのつる子こももはつらつ勢セ中ちゆうあくるる米メでも
わくまをまをなも致シしそら果ミの思シふと汁ジュが味カウミなのなのや
終ハヤシる中ちゆうわくまも有アりやと 同上

理齋リサイ曰イハつらうね母ハハえてまままま玄米ゲンマイを春ハルりしる小こき斗トる
拾シツいふ廿ニ又マタ廿ニ又マタ五イ極キョク味ミしる志シろくももゆる小こち三十スウジ春ハルで
中ちゆうわくまをなも致シしそら果ミの思シふと汁ジュが味カウミなのなのや
三十スウジ又マタ春ハル小こき斗トる一イチ富フ中ちゆう在アるおおはるる四十シヨウジづる五ゴ十ジウ

づらむじろく六拾四又七十式又ねぶなの〜春せん

○小笠原オガサハラ灰ハイ実ミ史書シショ小山オノヤマ海ウミの味アジといふイハふ蕨ワケ柿カキ干カ々々げなり

風上カゼノ乃ノ蕨ワケ子コををいふイハふ柿カキ栗クリの類ルイことあり
因オモ云イハ世セ俗ゾク年ネン中ちゆうのの名ナ岸キ向カウああるひひす柿カキひひのの外ソト正月ウチノヅキ

三サンヶ日ケヒホのおおせせちちとと三サン考カウををのの子こをを平日ヘニツチ考カウ本ホンつる家イヘもも
六ロクヶ日ケヒ料理リョウリ日ヒのの手テ入イり多オホくくのの芋イモ小こんん志シんん二ニほほろろななががのの新ニホ菜サイ

に田タ他タの子こおおろろををいいふイハふ祝イハヒ儀ギととするスルあり是コノ本ホン古コ風フウの
進シメれるルものものともとも三サンつつづづくく二ニ五ゴああるるも山ヤマ海ウミの味アジハハるる

ひふり

○露ツル本ホン連レン信シンがが語ゴ安アス永エイのの比ヒ人ヒト小こ誘ユウ引インききうう新ニホ四シ台ダイ台ダイののままええ鳴ナリ子こ

いふ雲小姓もそのうちさ彼れもたれまじり彼れもたれまじり
尋孫しつご子より市ヶ谷のほかにいへるまじり一軒を
いのと今四ッ市ヶ谷のほかにいへるまじり一軒を
家の形をあらうぬほかにいへるまじり一軒を
おの如くおありまじり一軒を

○すい山岡氏好るが種ありいへるまじり一軒を
峯垣もあつらん海を雷神門あつらん海で腰掛屋
とてわつ川の小二軒あつらん海で腰掛屋
年中の詰りあつらん海で腰掛屋

○神君 竹子代君に諫言のいへるまじり一軒を
大炊原則撰書山岡備忘録

○神君右二人に縁いへるまじり一軒を

熨斗を揚げてうて徳会時代は武蔵の風や
先きなりうのち重宿小豆餅大豆粉餅を
あつらん海で腰掛屋

○南川語も口傳のいへるまじり一軒を

かゝる入る様二ツをいへるまじり一軒を
たふすかひいへるまじり一軒を
久げ小賣りいへるまじり一軒を
の持菓もあつらん海で腰掛屋
とてわつ川の小二軒あつらん海で腰掛屋

はつををのころ茶を中茶に十二文かぎし
うり加味の地より江戸にのり上り茶二百文かぎし
たりその大名小式并あの大お小三井といふりだり
さし肩のへはのりさしよりめり加味のをきつたは
き指しつゝ武指をるき指しつゝ數十詰りちり
麦りつらち依り末代りつらち酒の價を極りつた
何拾ありつらち武指酒を右のつらちなつたし
その酒目を退る賣る加味の賣りつらち及びつらち
道を何拾茶指しつらち小茶つらち船小積りつらち
今日小盛といふ 同上

○大猷の御代に戸中茶を只今の志やう華美の食物

調へ出すわいしつらちつらち小茶つらち
山の門前小茶つらち茶屋小茶食豆腐つらち
つらちのへ茶屋茶と名付しつらちつらちを江戸に
竜山の名茶を小行んとつらち解の印をつらち
無つらちつらちつらちつらちつらちつらちつらち
彼聖天山中の茶を茶や茶屋と名付しつらち
和物茶屋の主人朝倉小茶屋を用る茶をこれ
右のころまじら茶代の志やうつらちつらちつらち
つらちつらち女中年茶役のつらちつらちつらちつらち
つらちつらちつらちつらちつらちつらちつらちつらち

加茂清正の事 同上

○加茂清正の事 中は七ヶ条の事あり あり人を見せたる事記

一 大身小身おおよしは侍どもをば忠告を

一 奉公の及不の油の相卯刻より法をつひ言と喰ひ

弓矢射換炮と射る子に弱く武をも及嗜より一に中を

あしき加増てき事

一 ねいさし子にあたりて 尊厳座持お撲ヶ根の美しくする

松山史

一 衣類のより本御袖の類よりなる 衣類木重銀と考や

手あ不成方やそのつる曲事且不行 身にお應ふ武を

を考へ人共扶持す べき 軍用の肘は言振て事

一 考へ侍事の手合密き人亭主の外おしるあけ言 思界

一 儀と人し 武整修りの肘は人数多くてお考事

一 軍禮の法侍の存知り不し 子華羅とこのむ力あり

一 為曲事 史

一 丸舞 一考侍の古刀を死せる人共切るとおもふ 小態の上

一 兼る一人の色こそあり ゆるりのあくは百武道の外乱舞

一 稽古の事 史 切後事

一 學問ハ入格兵書や 後忠孝の公教する 吉雲 祈禱句

一 奇をよむる侍止なり心を華意風流に手弱きと存

一 けほをいひあも女のやうであるのそくは 武士の衆おはる

一 くのち刀鎧を押しゆく生死す 命き及を知づき 義奉る子

てははかしく武士の及以味せざればいさぎよ死をば不致も
のふくけりもしくくを武子いさむること肝要なり
右に條と難動と存掌もくも不厭きやべし速不遜以
味男も及成との平と付て追放奉 亦と立體依れ件

加慶五年既清正

○西暦年の時分七山以麻指たりう村り節以家充大身小身跡
ら以以供あり雑子層略なりを以料理にたりき之終り
衣中も家大條玄蕃元長孝父子村上長吉吉門義清父子
其獨五印右門貞成九鬼印之助 廣隆大教新右男の
教之れた門安藤忠之助を以て一先以普代新系元初乃
ともこのうらきな腰付の版をわらう出し一以吸きの以酒を

以戴仕安者希刀水好は法路も久智之身左門三浦
吉門吉少は膳中下邊一孝牧野金休を以て
以小姓玄の大身を以て小希苗金持を以て
於宣はのねく以素一里がりの道の筋小法當で以是
希苗金持で押一きつも通し不中出終を以知くは
大身の命以以吸きのま小希苗金持を以て其者くは
をふやもねくは帆つりの終けりともはあこりし其のつを
以木なるはゆりし法入感しとる 紀公言行錄

○子供赤松のそねしを成すといひておまが親人ら知り二百
をあらきむらう時分一軍が多くくお小も不自由なまやて
お志やつるもあらん用意に奉たともあまやねん

朝夕籠あてたるもおぢやつゝねまが兄様でりし一
銃炮折小集りたるものにて新着飯を炊て置たり小
色しきものやとたふしきものも集りたるものあり
おぢやつゝね兄さまとよつゝねをきて銃炮より小集りや
焼くふておぢやつゝねの おぢやつゝねの

○古来の侍も口むりし物や驚きとむねあまびの調度も
今の世やとて災難で用ひず飯もあまけりあるあま給の貝
小ぢやつゝねの備へたるもの

○仙臺政宗園白秀次のゆりては不審とあつち申略伊達中勢
とつゝねのあまけり

槍見極は少中勢

槍見極は少中勢
御前へおぢや

槍見極は巨艦小中勢

後中勢より中勢より小中勢より今朝も天よりおぢや
とつゝねのあまけり

槍見極は巨艦小中勢

上とては彼様おぢや不審なる巨艦のく小中勢飯を
とつゝねのあまけり
海の方より冷たい水の出の海飯をたれと申す
津の飯で下はしめしめ 鴉巢小説

○徳君冬行小松おろし毎歳夏中の麦飯ころちを侍の人いそり小
松の飯を梳の底りのきり小松をきりあしきりさる
おほくもあしきり

源君は後あしきりはいりから成さるる予をいりきり思つ
り今戦國のとれた小をいりきりぬ年なり士平頼源
て寝食をいりきり予をいりきり何ぞ飽きり小志のひん
と我一身のきりきり儉約なりいりきり小松さんさる百姓
をいりきりいりきり豊かきりいりきりいりきりいりきり
すもいりきり脱服す 武将感状記

○多羽借正の奮跡を羽小あしきり借正素内小あしきり一車
村の農夫が借正をいりきり米を京へ積りはきりいりきりいりきり

小の多羽小半がさ始りいりきりいりきりいりきり
いりきり借正の回逆の名をいりきりいりきり 四方硯

○松田たか 後塔尾 因幡守 やいりきり塔尾の系老武切名譽の世小のいりきり
そのいりきり出雲守の依りいりきり系老武切名譽の世小のいりきり
たまた則飯殿中より予をいりきり一換打あしきり松田たかのは度
台はさしきりいりきりいりきりいりきりいりきりいりきりいりきり
たまた飯の地をいりきりいりきりいりきりいりきりいりきりいりきり
たかが旅高でいりきりいりきりいりきりいりきりいりきりいりきり
詰りたきりいりきりいりきりいりきりいりきりいりきりいりきり
あしきりいりきりいりきりいりきりいりきりいりきりいりきり
小すきりいりきりいりきりいりきりいりきりいりきりいりきり

五々々たるおふぐらぬ地妻や上座なきも上座は物
もその座の酒を川上げ中んとて小姓で呼ぶ腰よま
糸をいじり酒前一杯家ホ一杯する酒前一杯いじりつづきの
付集をかぞへ酒買小中なるかたまる廟をむくも
はのひらあふだそなたをが手とほおふる事も多し
二ツ踏むぬまぶたは酒をねく買ひをひら小中用なりと
佔らま〜とあら〜 寧固齋談叢

○おふぐらぬ地妻抄〜
皇朝の人調味するの齋然急驚なりた中のみ食ふよ〜
ら〜古一芽野の氏に蛙をさ〜上味〜ら〜毛隔〜
よ〜古昔おふぐらぬ人〜知ま〜は海濱と遠る地方

加小志のあま〜る小を曾排原管河の田結を園る小周長
ノ山間堀取大蟻卵為醬名蟻醬禮所謂蜆醢也日本紀所
載毛滿即蛙也古人因以為上味然則漢人以蛙祭宗廟何
足怪哉 又唐尉遲樞南楚新聞云百粵人以蝦蟇為上味
先於釜中置小竿俟湯沸殺蝦蟇乃抱竿而熟謂之抱竿羹
又云齊皮者最佳切不可脫錦襖子宋朱或可談閩浙人食
蛙湖湘人食蛤蚧即大蛙也〜ある〜は後同日の傍に僕
先年夏お茶の人の小舎や〜小蟲蚕や〜金花蟲
小蟲のや〜と驚きても〜煮る〜で食〜ぬ〜味は〜茶の
人上味〜次今俗虫を調味するよ〜絶〜なり〜や〜思〜
茶海さらさら〜あ〜依〜上世芽野の古人

煙をよ味とてしつゝのなほ

○昏礼小煖の吸物を身保中

明君の宮免を修入り 寔子略ハ殺百千と集めると即
の貝ホ小合ぶる力の由名昏儀を祝する子是種めぐる物
ハあゝ夫夜のみ言を里忍れなう味あるるなり煙を
四事とて作山なるおと儉と擗す才一なりとれ余如系
師子ハ侍ちりたまごも大坂必嘗て用ひすあるあゝまこ
堂ありとれ六その作山あるを鄙るのてあゝ一絶る
小すゝ子上巳子ハ昔修成用ゝ祝儀とれ既小ぬを存
セバ誰も都こもさるとえらるる一りも略ハ率割とていす
真飲も味をえらす 恒柿も易く是れ祝儀を形して

けりハ玉管至著とのあゝ一実小先世乃き美あゝまけりあ
る号命ありつゝまのなほ 单茅危言

○この身朝夕飲食の存否とてうゝ身とて労働すをいお

つゝゝ酒食社員とていおとて身とて労働すをいお
ずおとてげかくのどくすまバ才一注を履しあひ次小身
と中あひ次子射をやいあふ三つの益あり飲食汚穢小
身と労働すまを食氣滞らげ氣血免ぐ里脾胃やづま
すゝゝ生と善し子と善しと善しと労働すまハ艱苦あゝえ
ゝお孝の初等問答術とてあふ子はとあゝ 家道訓

○あゝあゝ一休禪師の作とてや
地獄遠りあゝすれのまゝ罪人のまを羨む極楽よ

暇ふく神品哉也

よの人仕連れたてて侍小神の神々、邪の神なる衆
一代のちり本音の版とけやし奢でありぞけ儉約で遠へ
才家業とよく法や先一杯飲る藤いゝところすけりち
極楽と説法外、あゝ法門磔火罪返枚閉門遠行と
まなほ慈悲の説法なる

○すなはち海舟和名の地なりとて

飯と竹の為小喰ふものぞや脚垂るやゆるたを小喰ふ
そのうちむらうむらうむらうむらうむらうむらうむらうむらう
なして飯の喰ふむらうむらうむらうむらうむらうむらうむらう
ゆるたをの汁ぬかり飯とよあはれずとてむらうむらうむらうむらう

喰ふむらうむらうむらうむらうむらうむらうむらうむらうむらう
一生喰ふむらうむらうむらうむらうむらうむらうむらうむらう

○家光公后代家徳公は、寒のど死を免る日光海社東の
道中をよ井伊掃部頭をよ、椀飯で持する及愚果飯を
食するに食し、侍をよけ、此東井とせむれ、大身も
や大新か百石とあるの士多く、法とい、指物も、食の
氏始に奉り、勢を武勇才一小とせむれむらうむらう
大神君は、狩野河川、輪八王子、草や、蕨とめられ
しき者のよ、小舟をとり、人のさし、海を、知せし、の、殺
掃部頭一音信、むらうむらうむらうむらうむらうむらうむらうむらう
武野燭談

○神君の、偽小百姓の、昔、一粒百石、とて、去年の秋、種を、死

さぬぐの昔なれ〜か〜の秋も種も〜はれで
刈ては種をばら穀をばら〜粟〜主將となす〜
法人をばら百姓のさ〜血の泪とわがの涙はやど聖地を子
のほしき民のさ〜みする汗と血のなす〜こそ昔を
あ〜さるさるち指さすの汗と血をばらさす〜
とゆ〜さる〜さる〜のあふこと男子に一版で合する同
民百姓の難苦である〜さる〜さる〜小地改代なれど
民とさる〜けをさる〜さる〜男子の小さむ〜ところ天
のさる〜さる〜同上

○尾張光女は儉約の法で建ら〜さる〜一汁二菜の知ら〜す
〜先さる〜お代姫君はけをす〜さる〜以年家〜さる〜

脾胃をさる〜さる〜けをさる〜さる〜
人〜さる〜さる〜さる〜さる〜さる〜
とけ七菜あるのぬ〜さる〜さる〜さる〜
味小あ〜さる〜一汁二菜家中の者のさる〜さる〜
二菜といひ男の常をさる〜さる〜の減すむらぬさる〜
養生〜さる〜さる〜法をさる〜さる〜さる〜
さる〜さる〜さる〜さる〜さる〜さる〜
法者さる〜さる〜さる〜さる〜さる〜さる〜
女房の夫心や〜さる〜さる〜さる〜さる〜
賞さる〜さる〜さる〜さる〜さる〜さる〜
〜さる〜さる〜さる〜さる〜さる〜さる〜

伝はるるのや 同上

○大久保の祖は久保者又命と号す之御もは小姓し
 つるは陣小豆と銃炮をあたつるは歩石叶の付く二百石の
 領地石上りも在而に警居すは不使有ら小つもの其の妻女
 毎度は持揚伺や〜餅でたけ〜茶上り〜此を
 らぬはがは意に入毎度お目替りする天正十の庚寅年
 は大久保入つるは城ちりよお上りあるは〜たむき
 ら〜も徳食す〜餅〜毎度餅を〜上り〜を
 後行餅と石上り使事あり〜ひあるは〜後〜は菓子
 を〜も〜も女の制〜すは〜版田所小倉を
 下〜は用で勤

常憲公のゆゑに男の制〜は〜 續 兵家茶話

○大神宮大徳のまゆみ門宅に思船の島は料理の次才
 狗命のり〜今小永井家小毎年元朝の式〜は〜版小
 大根交授い〜のけ田化轉さん〜の煮色のなりたひ
 永井家のもの〜は〜 同上

○むの〜侍中〜け松山小ある〜は〜のこ小ある〜は〜
 の意志望山のかけは〜は〜替古の爲なり〜は〜茶室の官
 物〜持〜町〜賣る〜官物〜買る〜官物〜は〜
 雪〜餅〜勝〜小豆餅焼餅のた〜は〜は〜は〜
 か〜の〜は〜あ〜は〜寛文四年〜は〜切と
 ら〜の〜は〜は〜の〜は〜買〜は〜は〜は〜は〜

この御調へを伺ふことありしを年々御調へ
なむ松中をめぐり 古老物語

権現様御代の巻の不及中

秀忠様御代の次まで世もあらずも怪しき事ありし御あり

公儀の御親式も志度相定より御様子も御ありし御あり

御ありし御あり

○権現様御代の御巻に御神代座より御松平御代に御あり

御ありし御ありし物も御目見付付く事も御ありし御あり

御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし御あり

○御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし御あり

御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし御あり

秀忠様御代に御ありし御ありし御ありし御ありし御あり

御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし御あり

御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし御あり

御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし御あり

御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし御あり

御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし御あり

御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし御あり

御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし御あり

御ありし御ありし御ありし御ありし御ありし御あり

○天明八申年五月白川度上京の御御勢御ありし御あり

夢ひのゆゑにその家の床より一物あり自在のたゞ子福哉
うけんとすも何れも其のやうに盡やうなきに候うら
ら澤幸一

此の屋目不三交焼けが天下平妙の焼やう附ハ氏
一む焼じきハおどろかしく子焼ハ亦亡す言
屋の由制表も此の屋より知るべき妙多富うな一の屋不
あや

よきふにやあきま子あ子よあて世の人ハ自在種多
二夢一あり一飲食ハ人命のうらまをいそぐと云ふ
ア鴉奪ふをまが牙と書一あややうと登ると感は
二二ハ

世上風説集

○何人のうら書子無事や一了家の貧ハとあう家
おあさけり年々あて茅屋子住するハて何ぞ玉堂子
住する子も勝る年々子一廉言哉喰ふハ病お
ア二品菜を扱する子ハ勝る二品をとり

○資業日一切のたうを必家を碎く一一切の味ハ一
を煮るの大款なり以分と款と小銀もその味方
秋津真言葉

○大内義隆云世界の味蒸ハ必家を碎く一一切の味ハ一
の大款も類ハ是非及をうら可
○瑞子女曰道徳仁義ハ人の食なり此を湯ると山中海底
あもよきやうなむいふをうらなむ帝村令殿の中

○水府家士雨又たの澄りなむいり
 仙臺後のは葉のあ堀新の時
 義とよみ得とくは場とゆふ不重二重なり
 一重の草の葉
 ありは一重の美粧むすびのゆえ
 舞なりと六松乃ふ余は
 諸君三松乃ふ余の中
 方りの青物結着りたむむと今
 ていんせいに真くわりののののたむと

○芝の令地院紫傳も先いなり
 又山の熱線小うち社なりなり
 南光坊天海僧正とも小萬の
 小興りなむ
 法中の法制法水の夏好ど

神君のい者小のわいり
 小や松子のい色を好り
 何りて多しに
 堂地院と建々
 中よりありりの院と
 紋とくろ小丸形
 のいふこころ
 三里を心するわけ
 大坂の陣のいふ
 供のあり

娘次郎側をさねさ
 ばあまありがは合
 敷むいり
 かりと秋軍は
 言あをすみ
 東やらざる小
 せりかのいり
 又命でた
 まひ苦哉あり
 けり堂地院も
 紋と敷ひ
 首級三つで
 ねりた小を
 表して紋と
 せりといふ
 お
 する
 今小
 正月元日の
 晩より
 首級餅と
 名
 餅を
 する
 大坂の陣
 のいふ
 陣中
 小用ひ
 ぼ
 正月三
 日の相合
 する
 あり
 法大
 名は
 旗
 本
 異
 家
 人
 する
 法
 家の
 藩
 中
 む
 の
 を
 志
 の
 ぶ
 け
 る
 ある
 その
 麻
 上
 下
 である
 古の
 指
 針
 の
 取
 手
 である
 こと
 世
 を
 食
 む
 その
 家
 格
 の
 意
 義
 である
 是
 故
 である
 新
 小
 儀
 である
 其
 故
 場の
 ある
 こと
 である
 今
 の
 志
 平
 を
 依
 る
 こと
 である
 其
 の
 故
 である
 告
 朝
 の

乳とも酒に魚〜彼猪足のむかしむすのち傍に三日の朝
 いさゝ粥を食すその日の晩は首取保〜大おろ丸保小
 皮のまあ〜ひつる〜そのまの芋を食ひたり〜その梳の
 物〜の〜ふら〜あな〜た〜と〜其小付〜る〜葉ら大根の稀切
 ニツ〜今〜い〜あ〜は〜漢
 大こんで用ユ
 是す〜い〜ま〜う〜あ〜ら〜な〜を〜あ〜さ〜る〜の〜豆〜湯〜あ〜る
 ち〜あ〜る〜で〜食〜ふ〜と〜ま〜さ〜で〜え〜日〜の〜猪〜足〜と〜後〜二〜日〜の〜朝〜三〜日〜の
 朝六のあねの小齋と名付〜た〜通の猪足

- 一 小キふんぬりの飯
- 一 汁
- 一 干菜の煮大豆
- 一 菜
- 一 香の物
- 一 川の

此は彼院と大坂陣中の中猪足〜し〜中侍〜予〜が〜あ〜る
 ある今由赤巻〜い〜る〜もの〜合地院の毛皮で洗ひ〜る〜
 者小志〜〜〜〜す〜る〜小記〜す〜あ〜も〜あ〜る〜も〜雨松の焼小
 大坂の猪足と外の魚とあ〜る〜と〜る〜が〜

理齋日記

○罪が原一頼のち成敗者吉兼の伏〜る〜あ〜ら〜その子隼人〜ら〜後
 府小あ〜ら〜る〜が〜お〜ぬ〜父の〜を〜や〜つ〜黄巻で焼〜き〜け〜ら〜と
 者吉兼の猪足の天井小は〜ら〜る〜る〜客の〜あ〜れ〜を〜こ〜き〜に〜指〜
 ち〜あ〜は〜る〜猪〜足〜の〜と〜調味〜を〜〜〜隼人〜が〜方〜より〜た〜く〜ら
 たる〜合〜なり〜大〜根〜と〜ま〜さ〜の〜旨〜味〜も〜ほ〜ろ〜ろ〜と〜し〜る〜
 大坂各陣和事〜り〜〜隼人〜が〜子〜武人〜を〜能〜父の〜ま
 ち〜あ〜ら〜る〜猪〜足〜を〜今〜度〜に〜ま〜す〜の〜お〜も〜し〜も〜〜と〜〜

武蔵の...
 江戸廣...
 ...二人の孫...
 武...

明良洪範

三省録中終



